

内藤正中先生を偲ぶ

△酒井 董美△

16日に内藤正中島根大名菅教授が83歳で急逝された。私は19日に島根大の知人からのメールでこの訃報を知ったが、たまたま逝去された当日の16日に在任なさっている神奈川県湯河原町から、ご本人名義で送られた大黒崎蜜柑がわが家に到着したところであった。くしき因縁と言わねばなるまい。

内藤先生は昭和30年に京都大大学院を修了し、島根大文理学部に着任。当時、学生だった私とは6歳しか違わないこともあって、よく声を掛けていただいたものである。本紙をなぞって紹介すれば1968(昭和43)年に教授。付属図書館長や法文学部長を歴任した。専門は日本経済史で、教授時代には自由民権運動の研究で知られた。また、山陰の風土や歴史についても精通し「島根県の歴史」(山川出版社)を執筆するなど、郷土史研究や普及に尽力した。研究分野は過疎や東アジア関係など多岐にわたった。菅教授(財政学)は「県

93(平成5)年の退官後は、竹島(島根県隠岐の島町、韓国名・独島)に援助された業績は大きい。島根大では法文学部の創設に尽力され、若手の育成に熱心な方だった」と振り返った。

郷土史研究、普及に尽力 竹島問題にも積極的な発言

内では過疎対策に力を入れ、地域を回って学問的に援助された業績は大きい。島根大では法文学部の創設に尽力され、若手の育成に熱心な方だった」と振り返った。

さらに挙げれば、昭和30年代から40年代にかけて、今井書店から「山陰文化シリーズ」全48巻を出版するにあたり、その中心となったのが先生である。また、雑誌『島根地方史研究』を主宰、地方の研究者に発表の機会を提供されていた。島根大学退官後に勤務した鳥取女子短期大学(現在の鳥取短期大学)では北東アジア文化研究所の設立を手掛けられ、半年刊の『研究』は現在36号を数えるまでになった。



在りし日の内藤正中氏

私も縁あって島根大で後にも変わらぬ、亡くなるまで続いていた。昨年3月11日午後、たり、人情の機微を大切にしように鳥取短期大でもごまたま静岡県焼津市に用された方であった。山陰一緒した。時々松江市のあった私は、寄り道し両県の斯界に与えられたからの通勤でマイカーにて先生の所で談笑して影響は大きい。私たちは便乗させていただいた。たさなかに東日本大震災から、これからは進んでいとも多かった。そのようが起った。JR列車もかなければなるまい。ごな先生は、常に専門の研究不問となり、やむなく泊らなければなるまい。ごさんに努め、専門誌に寄せていただくことになった。冥福を祈るばかりである。稿を続けておられた。日だが、この時が先生にお中心である。それは退職した。

授)

(島根大法文学部元教授)